



建学の精神

神を忘れた良心は麻痺し、土を離れた生命は枯死する。愛農学園建学の根本精神は、神を愛し、隣人を愛し、土を愛する人格形成である。

聖書の神の言葉に呼びかけられることによって人間の良心は覚醒される。神と良心との不断の対話(祈り)によってのみ、人間は真人間となることができる。

「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」との神の言葉を、一日一日の生活の中に実践することが人生究極の目的である。

農業は隣人の生命の糧を生産する職業である。農業を具体的な隣人愛の実践であると確信し、土を愛し誇りと喜びを持って農業に従事するとともに、農業者の英知と力を決集し、農業者自らが主体となって、明るい豊かな農家と農村を建設する愛農救国救人類運動に生涯を献げる若き魂を育成することこそ、愛農学園建学の目的である。



愛農学園 校章・マーク
高の字のバックの図柄はヒマワリです。ヒマワリの如く大地に根を張って、太陽に向かう生命力あふれる高校生であってほしいという願いを込めた校章です。

学校法人 愛農学園

〒518-0221 三重県伊賀市別府690

TEL : 0595-52-0327 FAX : 0595-52-1428



創立

1945年(昭和20)終戦の年の12月、創立者 小谷純一の和歌山市の家で、愛農塾(のちの愛農会)が開校されました。これは、農業を愛し、農業に生きる仲間が、個人の思想、信仰の自由を認めながら、愛農会の二つの祈り(平和の祈りと村づくりの祈り)と愛農精神(神と人と土を愛する三愛精神)に共鳴する人々が集ったものです。平和で明るい農村・社会を実現しようと、自主独立の農民運動として推進され全国に広がっています。

この活動が、やがて学校設立に結びつきました。愛農会が発会以来、一環として目標にしてきたことは「人づくり」による「仲間づくり」による「村づくり」です。農業と農村を改革していく主体は、あくまでも農業者自身です。自主独立と愛と協同の精神に目覚めた農業者の「人づくり」なくしては、農業と農村の改革はあり得ません。

財源も何もない農業者の集まりである愛農会が、愛農学園という「人づくり」の場をつくることができたのは、愛農会発足8年目に、会員の山本哲夫による〈愛農根本道場〉創設の提言が火種となりました。学校づくりにはだいたい300万円ほどかかるだろう、そうであれば理事は一人当たり25万円ほど負担しなくてはならない、という話も出ました。25万円というのは、今のお金でいうと200~300万円に相当します。しかし、ほとんどの理事は「25万円出そう」と決議して散会しました。創設の産みの苦しきは、たくさんの人の祈りと捧げによって、結実を見たのです。

幸いにして、スイス東アジアミッションから、3万フラン(当時の為替相場で約250万円。現在の貨幣価値にすると2500万円ほど)の寄附が寄せられました。

1954年(昭和29)4月、中学卒業生を対象とした全寮制2年間の農業教育を〈愛農根本道場〉として現在地で創設しました。4年後に〈愛農学園高等部〉と改称。翌1959年(昭和34)には3年制に改編しました。

1963年(昭和38)1月、全国愛農会総会で学校法人愛農学園を設立し〈私立愛農学園農業高等学校〉を設置することを可決。同年12月10日(創立記念日)には三重県から高等学校設置が認可され、翌年4月第1期生を迎えました。1967年(昭和42)には農業専攻科が認可されています。

創立の背景と歴史

愛農会及び、愛農学園の創立者 小谷純一は、1910年(明治43)3月21日に生まれました。京都帝国大学(当時)農学部卒業後、全国各地の農民道場の創設に参与します。肺結核に倒れ、医師から余命2カ月と言われましたが、玄米正食療法によって起死回生します。

大阪府立農学校教諭、和歌山県青年師範学校教授を歴任し、敗戦と同時に教職を辞し、念願の百姓になって水田90a、畑50aの自家経営をしながら、自宅を開放して愛農塾を開校しました。

これが発展して全国愛農会となり、三重県青山町に愛農学園の前身である〈愛農根本道場〉が創立されます。機関誌『愛農』、『聖霊』誌などを創刊し、神・人・土を愛する精神、すなわち三愛精神を啓発しました。

小谷は、1964年(昭和39)から12年間、愛農学園農業高等学校初代校長を務めたのち、同学園長に就任しています。2004年(平成16)10月1日昇天しました。

愛農学園の教育目標は、「卒業生全員が農業自営者になる」ことです。この目標達成のために、小谷は「農業という職業に心の底から誇りを持つ人間になれ」と生徒を励まし続けてきました。自身が食べものによって死から生還した経験を持つ小谷は、「人間にとって一番大切な生命を守るために、絶対不可欠なものは食べものである。その食べものを生産する農業という職業は、『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』と言われた神の言葉を、最も具体的に実践する職業である」と訴え続けてきました。

時代の流れの中で、卒業生の就農率が伸び悩む中、これを増やすためには「教育主体である教師が、まず農業への誇りを持つこと」「人間の生命の重さを伝えること」だと説きました。

産みの苦しみを経て1964年(昭和39)4月に開校までこぎ着けたものの、その後も厳しい状況に変わりはなく、校舎の施工にあたった奥村組に建設費の全額を支払うことができず、不足分を寄付金扱いにしてもらうほどでした。もちろん、基金などは一つもありません。それでも小谷は定員80名とする議案を覆し、「一人ひとりに行き届いた教育を」と40名にすることを決議しました。大きな志の前に、妥協は禁物だったからです。

そんな状況を変える大きな支援が差し伸べられたのは、愛農会の浦田善之理事の働きに拠ります。1959年(昭和34)西宮の吉田源次郎牧師の紹介で、スイス東アジアミッションの〈国際学生の家〉を訪ね、寮父のコーラー博士とベニングガーに面会したのです。2年後、浦田は紋付羽織姿で単身スイスへ向かい、愛農会のことを伝えました。ちょうどそのころ、高等学校設立の計画が持ち上がっており、毎年3万フランの浄財が寄せられるようになりました。

1968年(昭和43)第1回卒業式には駐日スイス大使が列席。この年からミッションの招きで、毎年農業研修生が送られています。その後、日本は経済発展を遂げたため、辞退してもっと貧しい国に援助を振り向けてもらいますが、スイス実習は続けられました。人口わずか600万人の小国スイスが、遠いアジアの一私立学校に20年間にもわたって寄附を寄せてくれたことは、感謝に堪えない大きな恵みです。



創立者 小谷純一(1910~2004年)
「農業者たる前に、人間たれ」と聖書による人格教育に情熱を傾けました。